１日３色

大川祐葵

「どうも～」「なんでやねん」「もうええわ」、いつか自分も、人を笑わせたい。ただそう思った。

世界はいつも色がない、友達のいない僕は今日も１人で空を眺める。帰り道はサッカーや鬼ごっこには参加せず花や虫を手に取り、家では共働きの両親を3歳から一緒に過ごした金魚と待つ。つまらない、ほんとにつまらない生活が続いた。小学3年生になり、いつも通り何かと理由をつけて汚い言葉が飛んでくる。そんな生活が半年ほど続き学校に行きづらくなった。それでも、行ってきますと笑顔を母に託し家を出る。作り笑顔のプロフェッショナルを名乗れるくらい、道化に化けた。夜１２時くらいだろうか、なぜだか目が覚めてしまいテレビを見た。そこには志村けんさんが飲み物を片手に話す様子が映っていた。僕は、『8時だよ全員集合』をDVDでよく見ていたし、２日くらい前には『バカ殿』を見て大笑いしていた。でも、今日の彼は違う、メイクもしてないし、声のトーンだって低い。芸人さんは大人しくてもなれるんだと憧れを抱いた。僕はその世界をめざ、さなかった。だって、無理だから。

中学に上がり、3年の文化祭、コロナ禍で映像のみの舞台発表となった。たくさんの係があり、第3希望までかける。第１希望は撮影、第2希望は演劇、第3希望はお笑い、思わず入れてしまった。人数が足りなかったのか、まさかのお笑い係に、周りにはやんちゃな子やサッカー部のキャプテンまで勢揃いだ。やばい、そう心が叫び散らかす。幼馴染も同じ現象でお笑いチームにいた。もちろんコンビを組んだ。先生にも大丈夫かと言われる。でも僕の家で漫才をみっちり練習した。大きなスクリーンに自分たちが映る。「右利きの〇〇と左利きの祐葵で左右です」「僕、遅刻魔やらさせてもらってます。「そんな職業みたいに」会場は大爆笑、なんて漫画みたいなことはなく、すごく滑った。静かすぎて、暖房の音が聞こえる。初めての漫才は大失敗。

高校生になった。僕の人生は結局こんなものだ。全然だな、ほんとにしたいことをさせろよ。僕の心はいつもクレームを入れてくる。当然高校でも友達はできなかった。僕が住んでいる地域は田舎であるため、小学校からほとんどメンバーが変わらない。１５人しかいないクラスでは、１人でもそれほどさみしくない。嫌なことなんか１つもない。言い聞かせアドバイザーの資格をとり、毎日自分に適用した。高校2年生の終わりに差し掛かり、そろそろ進路選択であるのに。やりたいことなんてない。適当にスマホを眺める。スマホで見るニュースにはお笑いのことばかり流れてくる。昨今、インターネットで知り合ったコンビ芸人が増えている。僕は、掲示板を見ていた。怖くなってやめた。手は止まらずに、LINEのオープンチャットでお笑い好きあつまれという、そのまま過ぎるグループに入った。相方を見つける気はない。でもいた、高校3年最後に思い出をつくりませんか？気がつくと、思い出つくりましょう！と入力してしまった。２月１４日バレンタインデー周りがいちゃつくなか、モテない2人がコンビ結成。名古屋で会う、話が合う、つぎも会う約束をする。楽しい。電話をする。楽しい。ハイスクールマンザイという吉本興業が行う高校生漫才大会で、準決勝へと勝ち進んだ。初めて認めてもらった気がした。CBCラジオが行うトーク甲子園準優勝、どんどん認められていく、楽しいが増えていく、鮮やか。見るものすべてに色がつく、心がいう。楽しい。僕はお笑いがしたい。芸名までつけた、仮根（かこん）。みんなの人生を笑いで支える。好きなことはこんなにもきれいなんだ。「どうも～、仮根と河原みりんで、二人狼と申します」よろしく。